

# 自然と人間、生者と死者の結び直し

哲学者・立教大学大学院教授

## 内山節

地震、津波、原発事故とつづく恐怖すべき現実、私たちに大きな衝撃を与えた。それはまるで生命の奥底に届くような衝撃だった。生命自身が身震いしているような衝撃、とでもいえばよいのだろうか。もちろん被災者はもっと大きな衝撃を受けていたことだろう。

こうして三月十一日以降の日本の人間たちは、言葉で表現できない衝撃の共有から出発しなければならなかった。しかも、もしかすると、さらに大きな衝撃に直面しなければならぬかもしれないという原発の現実をかかえたままで、である。

それは、私たちは生命の危機がすぐ横にある現実のなかで生きているのだということを感じさせることになった。死は遠くにあるのではなく、すぐ横にある。いつその扉が開くかわからない。戦後の人間たちは、そのことをみないようしてきただけだった。おそらく私たちはこれから、死と折り合いのつく生き方を模索

しなければならぬだろう。折り合い可能な社会をつくらなければならぬ。そう考えたとき、かつての人々は共同体のなかで死と折り合いをつけてきたという事実が甦り、これからの共同体よがえにコミニティのあり方を模索しなければならないという課題に気づかされることになる。

四月に入って私は、四月二十四日にみんな、それぞれの場所で、それぞれの方法で、まずこの大災害で亡くなった死者を供養しようと呼びかけた。多くの人が賛同してくれた。死者を供養するとは、死者の思いを受け継いで生きる、死者とともにこれからの社会をつくる覚悟の表明である。すでにはじめている救援の手を一瞬止めて、死者たちと向き合ってみよう。そこから自然と人間の社会を、生者と死者が深いところで結ばれている社会をこれからつくっていかう。そう決意しなければならないことを、私たちの受けた衝撃は教えているような気がする。

内山節（うちやま・たかし）

哲学者・立教大学大学院教授。一九五〇年（昭和二十五）東京都生まれ。東京と群馬県上野村を歩き来る暮らしを続けている。NPO法人「森づくりフォーラム」代表理事も務める。著書に『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』講談社現代新書、『戦争という仕事』（信濃毎日新聞社）、『創造的である』ということ。上・下『共同体の基礎理論―自然と人間の基層から』（農山漁村文化協会）、『里』という思想（新潮選書）などがある。